法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

子規と漱石の百年 ： 東北、郡山に於ける近代の受容

塩谷，郁夫

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文学誌要
(巻 / Volume)
67
(開始ページ / Start Page)
2
(終了ページ / End Page)
11
(発行年 / Year)
2003-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00009926

Hosei University Repository

〈論文〉

子規と漱石の百年

――東北、郡山に於ける近代の受容――

塩谷郁夫

はじめに

福島県郡山と正岡子規や夏目漱石との結びつきは、明治期における日本近代化の歴史と深く繋がっていて興味のつきない問題を提供してくれている。現在、郡山市文学資料館に収蔵されている夏目漱石から正岡子規に宛てた句稿（明治二十八年十二月十四日付）は、鎌倉市二階堂にあった久米正雄邸が遺族から郡山市に寄贈された時に一緒に保存されることになった。表装されて久米正雄が大切にしていた貴重なものである。内容については後で触れることにするが、漱石と久米正雄の関係はすでに大正文学史上において知られるところであるけれども、久米と子規とは直接には交流はなかったが、子規門下の河東碧梧桐等は密接に結びついていて、間接的にはその流れに位置づけることもできるのである。それは郡山においての少年時代の生活に遡って深い結びつきのあったことは、世にあまり知られていないことなのである。

正岡子規は明治二十六年七月十九日に芭蕉の『奥の細道』の旅を巡る『はて知らずの記』の旅の後に、郡山の俳人たちとの交流があって、その門下の内藤鳴雪、高浜虚子、河東碧梧桐が郡山に滞在して親しく交流したことは近代日本文学の地方文芸界への影響を知る貴重な記録を多く残している。これらを含めて明治という時代の地方での近代化の歴史的な背景を具体的な検証を試みるのが、この論考の目的である。

子規俳句受容の背景

郡山は城下町ではない、しかし、丹羽二本松藩の大変に重要な宿場として物資の集積地として藩財政を支えていた。宿場の商人は遠くは伊勢、越前、越後や近くは会津等から入って定住した者もいて国内の各地との商取引きをしていたことは重要で

Hosei University Repository

ある。二本松藩は江戸藩邸の経費として米を郡山から廻送していた。この廻送を郡山の商人が請け負っており、経済的な力を得て来ていた。一八六八（明治元）年の戊辰戦争により郡山は兵火にあって町の半分以上が焼失するという禍にあったが、蓄積していた資産によって復興して、商人たちは明治という新しい時代を逸早く理解して、新しい時代建設への要請を受けて、そのための投資を恐れることなく結束した郡山の商人たちは投資団体を設立したのである。これが明治初期に成った開成社と呼ばれる開拓のための投資組織である。この社の結成を呼びかけ、実現させた人物が宮本百合子の祖父、中條政恒であった。

中條政恒が福島県の開拓担当の役人（役職典事）として郡山に視察に来たのは、一八七三（明治六）年三月五日である。中條は福島県庁から郡山への道すがら輿の中で『閣龍伝』（注・コロンブス伝）を読んで「感慨嗚咽、死且辞セズ、必成ノ決心ニテ来郡セラレシトゾ。閣龍伝何ゾ人ヲ感慨スルノ甚シキヤ。精神事情相似タルヨリ、神契密着シテ涙トナリシモノナラン乎」と中條政恒の自伝的著作である『安積事業誌』[注1]に当時の様子が記述されている。この様な決意を持って郡山に来た中條は、荒野の大槻原（のちの開成山地域）を開拓する資金を郡山の豪商たちに求めることにして説得活動をしたのである。この明治六年の中條政恒の説得の様子は、『安積事業誌』に詳しいが、この荒野の開拓に出資することを商人たちが盟約したのが、四月十二日で来郡した三月五日からの短期間に中條の説く開拓事業を理解でき投資を決意した背景には何か特別のものがなければならぬはずである。郡山の豪商たち二十五人が投資に合った利潤を簡単に直ぐ手に入れることが可能だとは思わなかったと推測されるのである。それよりも中條計画の根底にある思想に共鳴するだけの知識を持っていたからであったと考えられるのである。この投資組織を中條の座右銘とした思想の「開物成務」[注2]からとった開成社と名付けたことによっても理解できるのである。「開物成務」とは中国古典『易経』の「繫辞伝上」にある言葉である。この思想は、近世以来の、またはそれ以前から日本人の歴史意識の中に存在した思想である。丸山真男も論文「歴史意識の『古層』」[注3]でも述べているように頼山陽の思想の中にもあり、すでに郡山の商人の中には山陽の思想を学び知っていた人物もいたと考えられるのである。頼山陽の三男頼三樹三郎が旅の途中（弘化三年）に郡山の海老屋（横田治右衛門宅）に宿泊して、鮒沢耕山、積口桃翁といった郡山の豪商出身の文化人と交渉を持ったといわれている。耕山は幕末に京都に遊学した人物である。耕山は一八七六（明治九）年に明治天皇が開成山開拓を視察した時に随行した木戸孝允（桂小五郎）と再会して明治天皇に拝謁する手引きを受けているのである。耕山は幕末の郡山俳人の一人であり、耕山と親しかった桃翁も同じく俳人であった。彼等は日本近代化の入口にいた地方の文化人であり、この耕山や桃翁の影響を受けて俳句を作って活躍したのが永井耕雨（一八三九年～一八七四年）である。耕雨は三十五歳の若さで病没したが、この耕雨の甥にあたるのが永井破笛であり、子規と親しく交流して郡山に日本派の俳句結社の群峰吟社を結成した人物なのであった。

Hosei University Repository

破笛の父は永井松華で、郡山の豪商永井家の養子に入った人だが、この永井家の当主は永井老竜と号して俳人であった。永井家は会津出身の郡山の代表的商人で一族には俳諧や絵画に親しんだ文化人を多く輩出している。永井耕雨は鮒沢耕山と一緒に京都の南画家中西耕石の門に入って絵を幕末の京都で学んでいるのである。破笛の父松華は明治に入ってから東京の雑誌等にさかんに投句している。特に注目すべきものに三森幹雄の「俳諧明倫雑誌[注4]」に投句して掲載されている。「俳諧明倫雑誌」の主宰者三森は明治政府が祭政一致とキリスト教排斥の目的をもって教導職を設けた時に受験して任命された人物であった。三森は福島県石川郡中谷村（現、石川町）の出身で、子規は『はて知らずの記』の旅には三森幹雄の紹介状を持参して福島県入りをしている。このことは注目すべきことだと思う。

郡山では永井家一族をはじめとして俳諧文学に親しむ商人が多くいたのは二本松藩政下以来の文化的伝統であった。中條政恒の説得によって開成山開拓に投資した商人たちも含めて、俳諧を通じて相互に交流していたばかりでなく時代意識を強く持つようになったことは明瞭である。大槻原（開成山）開拓が、明治政府による殖産興業に拡大されて安積平野全体の開拓として国家の近代化に組み入れられると、商人たちの国家意識が強まったと思われる。[注5] 郡山の商人たちは、一八八九（明治二十二）年に陸羯南が発行した新聞「日本」を東京より取り寄せて購読者となっている。そして、子規が一八九二（明治二十五）年に新聞「日本」に入社して、明治二十七年二月に俳句欄を設けると直ぐ五月には郡山の永井松華が投句して掲載されているのである。[注6]

子規と群峰吟社の人々

子規は三森幹雄の紹介状を持って『はて知らずの記』の旅に出発したのは明治二十六年七月十九日である。芭蕉の句境である風流を求めた旅であったが、最初の訪問地である白河へは汽車の旅となったのである。芭蕉の様に白河の関を越えることなく白河に入った子規は「きのふ都をたちてけふ此処を越ゆるも思へば汽車は風流の罪人なり」との感想を述べている。三森の紹介状は白河在住の彼の門人中島山麗に宛てたものであった。この中島から須賀川の代表的俳人の道山壮山への紹介状を持った子規は須賀川を訪ねたのち、壮山の紹介状を持った子規は郡山へ来たのである。しかし、宿泊した郡山の俳人宅がどこであったかは『はて知らずの記』には記述がない。調査をすすめているが永井家等は没落していて記録は散失していて残念ながら現在は不明である。道山壮山の子孫は現在も俳人として活躍しているが、資料は不明である。郡山においては子規関係の資料を多く保存収蔵している今泉家（桐舎の子孫に尋ねても不明であり、「桐舎日記」も残されているが、その点の記述はない）にも明確な資料が残されていないのである。子規は当時の郡山の様子を次のように描いている。「旧天領にして二千余戸の村市なり。三四の露店氷を売れば老幼男子更るがわる来たりて梭を織るが如し」（子規は天領としているが、二本松藩領で何を根拠にこの様に述べたかは不明）と、その賑わいを描写してい

Hosei University Repository

るが、翌日には郡山の宿泊先を出て、浅香沼を見ようと出かけている。途中で安達太良山を遠望して「安達太郎山高く聳えて遙かに白雲の間に隠約たり。土俗之を呼んであだたらといふ」と述べてのち、次の句を詠んでいる。

短夜の雲をさまらずあたゝらね

（この句碑は郡山ではなく寒川鼠骨の筆により、二本松市杉田の住民センター地内に建立されている。子規が南杉田の遠藤菓翁宅に一泊したことから子規五十一回忌記念に昭和二十七年に建てられたものである）

この句を詠みながら歩を進めて行き「郡山より北すること一里余福原といふ村はづれに長さ四五町幅二町もあるべき池あり。これなん浅香沼とはいひつたへける」とあるが、福原とは現在の郡山市富久山町福原のことである。この福原の手前の地にある富久山の久保田が永井松華の生れた土地である。この久保田には阿弥陀寺があり、住職は久義庵半両と号して永井老竜や松華の俳諧の師であった。この阿弥陀寺には子規が寄ったと推測されるが子規は記録せず、阿弥陀寺はその後たびたび火災にあって記録が残っていないので詳細を知ることができず残念である。

松華の子の永井破笛が子規に手紙を出したのは一八九四（明治二十七）年十月である。[注7]

「小生も貴社日本新聞より引続き小日本拝読罷在候處毎号俳句御掲載相成初めの程は雲煙過眼に打過して居候處」（中略）「先生の俳話及御高作等は毎号特に感服の外無之」と書き子規に俳句の指導をお願いすると同時に別便の小包で自分の彫った印章と、破笛の篆刻の師であった会津若松の大橋醒仙の作である印章を贈って、自分の俳句を列記して教えを請うたのである。次の九句を書き送っている。

撫て見る祠は古し閑古鳥
杜鵑きくきくたとる山路哉
人去て蘆残る處魚躍る
秋寒し木魚に暮るゝ一ツ寺
丸腰の武家衆も交る踊りかな
月澄んで水の様なり蟲の声
牛高し橋の裏行秋の風
山里の命なるかも一夜酒
夏痩は我心にも似ざりけり

「以上近作御叱正被下度候拝」

また俳号についても「一ツ俳号御命し被成下度是又御懇願申上候」と申し出ている。この手紙から考えられることは、父松華の購読していた新聞「日本」の俳句欄から子規に対する強い共感を抱いた気持ちがよく表現されている。破笛という俳号も子規に選んでもらったものである。

子規は次の様な返書を破笛に与えている。十二月三十一日付で「岩代国郡山上町、永井英次郎殿」となっており、差出し人は「東京下谷上根岸八十二番地、正岡常規」となっている。破笛の落掌したのは明治二十八年一月二日である。

「拝啓　爾後御無沙汰に打過候處益御清栄奉大賀候いつかは御手刻の印章等頂戴拝謝致候　御雅号之事御申聞に相成候處小生ハ破笛之方よろしくと存候

Hosei University Repository

右御返事遅く相なり申訳無御座候」

とあり、子規は次の五句を「御一笑ニ供候」として提示している。

御手上に落葉たまりぬ立佛

日のさすや枯野のはての本願寺

朝霜やかれ〳〵赤き蓼の花

薬喰ひ人の心の老にけり

行年をただあてもなく船出哉

福島県において最初に子規の俳句革新に応えて日本派俳句の結社が設立されたのは、福島町（現、福島市）の隈水吟社である。一八九八（明治三十一）年三月に「福島新聞」の記者をしていた高谷鉄堂（東京出身）が、金森匏瓜（宮城県石巻の人）と図り結社のために県内の俳人たちに呼びかけた。郡山からは永井破笛、菊地不非、松山華水、斎藤杏堂等が参加している。その後、子規と交流のあった破笛が湯浅十框と計って郡山に群峰吟社を一八九八（明治三十一）年四月に結成したのである。『福島県史』（20・文化第二編文学）の道山草太郎の記述によると、破笛、十框、国分虎風の三人が発起人だとしている。今泉桐舎の記録『桐舎と群峰吟社』では破笛、十框の提唱で吟社が生まれたとしているが、県史の記述の様に国分虎風が入って三人としていることは注目すべき点であり、興味深いことである。

国分虎風は本名は守、その以前は虎吉といって郡山西ノ内の出身である。安積開拓のために開削された安積疏水の議員や郡山選出の県会議員となり議長も務めた政治家であると同時に俳人としても群峰吟社で活動したのである。彼は郡山の商人や文化人と結びつき安積開拓と深い繋りを持ちながら、県の近代化の中でも大事業の一つであったところの鉄道東北本線と交差する郡山を起点とした磐越東西線の敷設に尽力している。おそらく日本派の句会は文化運動と同時に経済的、政治的な問題も話し合われる場を提供していたと考えられるのである。それはさておき郡山の多数の人々が群峰吟社に結集した。最初の参加者は次の俳人たちである。

国分清流、常松碧子、二宮蘭陵、斎藤杏堂、田辺三貝、野川乱菊、大山松籟、今泉桐舎、永井不朽、夏井三松、橋本吟松、西村雪人、東海林蘆秋、松山華水、鈴木十堂、杉山蓬軒、小川青可、遅鬼、翠松、麻昔等である。俳号のみを記したが、これだけの人数が集まって作句活動が展開されたことは、歴史的にも特筆されるべきことだと思うのである。それが子規の俳句革新の思想に影響されていることは、子規がその短い生涯において展開し指導した主張がいかに大きく日本の各地に文学的な種を蒔きつけたかの一つの説明になると思うのである。この土壌となったのは明治初期に形成された市民階級（地主・商人階層、また、それら出身の教員たち）であった。

郡山を中心としての安積地方では、殖産興業という政府の政治、経済政策に深く関係したために、周辺の三春、石川を中心とした自由民権運動（県議会の河野広中等）とは結びつきを持たなかった。[注8] また、士族授産の政策で安積開拓のために鳥取から来た士族たちは、鳥取の民権派の共立社に所属した人々だっ

Hosei University Repository

たが、開拓による重労働と困窮により関係していないのである。[注9] 久米正雄の父由太郎も明治十五年には着任した三島通庸県令に退職届を出して長野県へ転職しているのである。[注10] この様な地域の社会的背景が陸羯南の新聞「日本」を購読させたのだろうと推論されるのだ。

現在、群峰吟社の資料は永井家や多くの同人たちの子孫の移転のため散逸しているが、郡山で保存が比較的よいのが今泉桐舎の子孫宅と湯浅十框の子孫宅である。今泉家では群峰吟社の機関紙「岩磐時報」を収蔵しているばかりでなく、桐舎の個人『日記』が保存されていることである。また、桐舎と交流のあった文人の色紙、短冊が多数保存されている。

「岩磐時報」というのは、永井破笛が群峰吟社の機関紙として発行した新聞である。以前に拙著『福島と近代文学』（桜楓社刊）の「日本近代文学史との接点――資料の発掘――」において述べた様に、この「岩磐時報」は福島県立図書館、郡山市立図書館等にもなく、たまたま今泉桐舎の子孫宅を訪問して初めて目にすることの出来た貴重なものである。一八九八（明治三十一）年十月十日の創刊号からはなくて、一年後の一八九九（明治三十二）年十月十日（火曜日）第十三号からの保存綴である。この号の冒頭「改良の辞」には「政治の刷新、実業の鼓舞、教育の督励、風俗の矯正」を掲げて生まれて「一周年を迎へたるのみにして、号を積む事亦僅に十二に過ぎずと雖も、幸に読者諸彦の餘光に依り、其一言一論は一般に重視せられ、教育に風俗に将に政治に実業に、貢献する所一二に止らざりし」と述べて「大改良を断行し、発行度数を三回に増加し、其主義の拡張を図る」としていることでも、この新聞が単なる文芸新聞ではないことがわかる。ただ、半分近くは文芸的文章や記事が紙面を飾ってはいるけれども、政治的、経済的主張も展開していて、新聞「日本」の思想も強く反映したものであったことは言うまでもないことである。

明治三十三年一月二十日第二十三号には、子規の「病牀日記」と「賀正」の挨拶が「正岡常規、東京下谷区上根岸町八十二番地」として掲載されている。この年の四月十一日第三十一号には匏瓜の「子規先生を訪ふ」という訪問記が掲載されている。「根岸草廬に同人の新年会」に参加した感想を述べた文章である。匏瓜は宮城県石巻の勝巴の紹介状を持って訪ねたとのことで、子規と勝巴は親しく交流していたとのことである。その時の子規の印象を匏瓜は表現している。「座敷へ通った子規先生の病気で寝て居る事は乍陰聞いて居たから直ちに寝て居る人に注目した今迄の予想がカラリと違った床上の人は年頃三十二三で無髯で面白い顔で至って品格の見えない唯だ磊落らしい人であったから話の取りつきはよかった」と描写して、その雰囲気を伝えている。

群峰吟社で子規と直接に根岸で面会して記録を残しているのは今泉桐舎である。『桐舎と群峰吟社』（昭和五十五年十月刊、発行者学校法人今泉女子専門学校）に収められている「桐舎文集より抜萃　春のおもい出（明治三十五年四月）正岡子規訪問」には、次の様に描かれている。

「用事ありて都に上りつるついでに常に慕はしく思える子規の

Hosei University Repository

君を、根岸の里にたづねしに君は病重きなかにも、何くれと語らるゝその厚き情にほだされて、暮るゝも知らで居たりしが、やがてそこを辞しての帰る折、とある堤にさしかゝり夕風にひらひらと散り来る桜の花片を拾いて、記念にもと携へたる書物の中に入れて帰りしなりけり」

岩波文庫の土屋文明編『子規歌集』（一九五九年一月刊）を見ると、「明治三十四年」の項に「今泉丈助へ（一月十八日）」として短歌「みちのくのあだたら真綿肌につけ寒きゆふべは君し思ほゆ」が収録されているが、『桐舎日記』の「明治三十四年一月十八日　長く病床にありし正岡子規より短冊一葉贈らる」との記述がある。

今泉桐舎は本名は丈助、県立会津中学校の国語科教員であった。現在、今泉家には、この短冊が保存されていて次の様なものである。詞書があり「御手づくりの真綿　御煩真有難く存候」とあり

みちのくのあたゝら真綿肌に徒介
　寒きゆふ遍者　君し思ほゆ　　規

桐舎は冬の寒さを心配して子規に真綿を贈ったところ、右の短冊が贈られたとの事である。日記によると一月二十二日に桐舎から子規に反歌を贈っている。

いたつきになやめる君がしのばれて　雪の一夜をあかしぬるかな

桐舎は子規門下の第一人者である内藤鳴雪とは特に親しく交わり、「岩磐時報」の明治三十三年九月二十一日から翌年一月一日号まで七回に渡って、上京して鳴雪の「俳句講義」を筆記してきたものを連載している。鳴雪は来郡すると桐舎宅に宿泊して句会を催して居るのである。桐舎と同じく県立中学校の教員で群峰吟社に参加しているのは、県立安積中学校教頭の西村雪人と国語教師の田辺三貝であった。この二人が久米正雄、俳号三汀の生みの親といってよい俳人である。雪人は中学校の野球部の監督もしていて、野球部入りした久米正雄の指導もした人物である。二人は中学生の久米正雄に俳句の手ほどきをして、中学校の教員の俳句会であった浅香吟社に参加させている。久米三汀自身も中学校内に笹鳴吟社を結成して仲間と作句している。西村雪人は河東碧梧桐と親しく日本派の中でも、碧梧桐の新傾向俳句を支持して、久米にも新傾向俳句を指導したので、久米三汀はその影響を強く受けて、次の句を詠んだのである。

魚城移るにや寒月の波さゞら

この句によって久米は、「魚城の三汀」と呼ばれる様になったのである。

久米正雄の中学生時代と俳句の関係については、『久迷亭自傳』（「文芸春秋」昭和十二年一・二月号）に詳しいが、久米正雄を中学生、少年の扱いをせずに積極的に群峰吟社の句会に参加させた雪人や三貝といった教師の人格に魅力を感じさせられるのである。来郡した碧梧桐や虚子らとの直接の触れ合いは大いに少年の文学観を成長させたのであった。この雪人ともっとも親しかった群峰吟社の俳人は、湯浅十框である。十框は群峰吟

Hosei University Repository

社同人の中でも早くから碧梧桐に接近して新傾向俳句を賞揚している。その影響を久米三汀は一番強く受けたと思われるのである。

碧梧桐は郡山へ来ると十框宅へ宿泊して句会を催している。碧梧桐の記録したものには『三千里』の明治三十九年十月六日の記事に「郡山まで汽車、湯浅病院なる十框庵に入ると、新知旧識已に談笑沸くが如きものある（岩代郡山にて）」とある。十月十一日まで滞在して群峰吟社の人々と句会を催している。（春陽堂文庫『三千里』第一巻昭和十二年刊、講談社学術文庫『三千里』（上）一九八九年刊参照）。久米が夏目漱石の門人になる以前のことである。久米三汀と子規の間接的な関係というのは、この様なことを言ったのである。久米正雄文学にあらわれた人事に対する近代的な観察眼というものは、郡山における生活体験が深く関係して形成されたものと考えられるのである。

夏目漱石と郡山

漱石と郡山は直接には交渉はない。しかし、先に述べた様に久米正雄との関係で郡山市文学資料館に収蔵されることになった子規宛の俳句稿は貴重な遺産の一つであろう。漱石と久米の結びつきについては、彼の著作『風と月と』（鎌倉文庫、昭和二十二年四月刊）に詳しい。しかし、どの様な経過で子規宛の漱石句稿を久米が収蔵していたかは不明である。小説『破船』（大正十一年一月～十二月「主婦之友」）の事件以来、親友松岡譲と絶交状態であった二人が、和解したのは昭和二十一年の春である。[注1] 和解後に二人は京都大丸で漱石を偲んだ「余技展」を催している。この時に久米が松岡から寄贈されたものだろうと推測されるのである。

今、手元にある『漱石全集』第二十三巻の「詩歌俳句附印譜」（岩波書店、新書版全集昭和三十二年四月刊）を見ると、明治二十八年「正岡子規へ送りたる句稿　その八　十二月十四日」付で巻紙に墨書したもので、ところどころ子規の朱墨が入れてある。

定に入る僧まだ死なず冬の月

の句を冒頭にして四十一句、最後は「湧が淵三好秀保大蛇を斬るところ」とあり、句は「蛇を斬った岩と聞けば淵寒し」である。宛先は「大政」、差出人は「愚陀」拝となっている。漱石は自分のことを「愚陀」または「愚陀佛」「愚陀佛庵主」と名乗っているのである（全集注解参照）。

同年の十一月二十二日付の句に「愚陀佛は主人の名なり冬籠」がある。この辺の事情は、和田利男著『子規と漱石』（めるくまーる社、昭和五十一年八月刊）にも詳しく述べられている。「愚陀佛庵主」は子規宛の同じ明治二十八年九月二十二日の「散策途上口號三十二首」に初めて書かれているものである。

今泉桐舎の保存していた短冊の中に漱石の俳句があり、発見した時に直ぐ「漱石の年譜」を作成中だった今は故人となられた荒正人宛に写真を送り検討してもらったところ、贋物だとの返事をいただいたのである。実物の短冊その物を見せたのでなく、小さい写真を送っただけであったので気になっている。桐舎と子規や鳴雪、虚子、碧梧桐との直接の交流について話さな

Hosei University Repository

かったのである。桐舎がこの短冊を手に入れた事情が明確になれば、本物か偽物かがわかると考えている。俳句の短冊は二枚である。

御降りになるらむ旗の垂れ具合

これは、明治四十年一月の「ホトトギス」に発表された二句の中の一句であることは、全集で確認できるのである。もう一句は次の様な作である。

入海を遠くに畠を打ってゐる

これは全集にはない句である。まだまだ群峰吟社と子規や漱石をも含めて、その関係を調査する必要を感じている。

一九〇六（明治三十九）年九月の新聞「福島民友」によると、郡山において浅香会が子規忌を行ったと記事がある。「社中四人雪人庵に会して居士の霊前に於て子規忌を営む」とある。郡山と漱石に関するものは、今のところ見ていないのである。

注1　現在印刷されていない。郡山市立図書館に収蔵。全十三巻で墨書。塩谷も参加した安積開拓研究会が巻一～巻四まで翻刻『市史こおりやま』収、郡山市発行。

注2　横井博「『開物成務』考」参照、柏書房『殖産興業と地域開発』収。日本大学安積開拓研究会編。

注3　『歴史思想集』筑摩書房収、丸山真男の「歴史意識の『古層』」参照。

○日本における歴史的思考の際に、中国古典のうちでもっとも繁雑に動員されたのは、『易経』である。

○江戸時代の歴史的ダイナミズムが、「近代化」の一方進行ではなくて、むしろ近代化と「古層」の隆起との二つの契機が相剋しながら相乗するという複雑な多声進行にあった。と述べているのが参考になる。

注4　矢部楷郎著『福島県俳人事典』昭和三十六年六月、刊行会発行、非売品。

注5　須賀兼嗣著『中條政恒先生略傳』昭和七年十月刊、参照。

「先生は、維新後の国情より世界の大勢に及び、国民の自覚を促し、物資充実の必要を延べ（ママ）、荒野開拓の急務より蚕糸に論及して、貿易の利を縷述し反復数更に及ぶまで熱心に説いた」説明している。

注6　注4に同じ。

注7　講談社『子規全集』別巻一。

注8　『郡山市史』4　近代（上）

注9　矢部洋三著『安積開墾政策史』日本経済評論社、一九九七年八月刊。収の「士族授産政策の相対的低下と移住士族の質的変化」等参照。

注10　塩谷郁夫「安積開拓と文学的背景」、日本大学安積開拓研究会編『殖産興業と地域開発』柏書房、一九九四年七月刊、収。

注11　関口安義著『評伝松岡譲』小沢書店、一九九一年一月刊。収の「久米正雄との和解」参照。

その他の参考文献

○秋尾敏著『子規の近代』新曜社
○和田利男著『子規と漱石』めるくまーる社

Hosei University Repository

○栗田靖著『子規と碧梧桐』双文社出版
これは、日本派の碧梧桐を知る参考になる。
○杉浦民平著『現代日本の作家』未来社　収「正岡子規」
これは、陸羯南と子規の関係、特に新聞「日本」の思想、子規と自由民権運動の関係について論じた部分は大変に参考になる。

（しおや　いくお・一九五六年卒／郡山市史専門委員長）